

浦頭引揚について

昭和20年8月15日太平洋戦争の終結に伴い、海外から約629万人の日本人が引揚げ、このうち佐世保引揚援護局があった浦頭には1,396,468人が上陸されました。

引揚者の多くは、栄養失調や下痢・皮膚病、敗戦の失意と迫害のために疲労困憊の状況でした。さらには、無言の帰国をされた人、船内で病に倒れ、上陸直後に不帰の客とられた人々がありました。

引揚者は、上陸と同時に消毒のためDDTの散布を浴び、検疫後約7キロメートルの山道を歩き、佐世保引揚援護局までたどり着き、引揚手続きを終えると衣服や日用品の支給を受け、2、3泊後、南風崎駅からそれぞれの故郷へ向かわれました。また、受け入れ側の引揚援護局は「引揚げる人の身になれ、この援護」を合言葉に引揚最盛期には不眠不休で活動されました。



浦頭引揚記念平和公園とその周辺施設

佐世保市は、当時の悲慘な引揚げの体験を後世に伝え、世界の恒久平和を願いこの引揚げの地を歴史的遺産として永遠に残すために、元検疫所跡地を見下ろす場所に引揚記念平和公園を建設しました。建設には、引揚者を含む全国からの寄付金も含まれています。

浦頭引揚記念平和公園の周辺には、太平洋戦争時、宮村国民学校の教師と小学生が掘った巨大な防空壕「無窮洞」、フィリピン・マニラに埋葬されていたご遺体と収容所や引揚途中で亡くなった約6,500人のご遺骨が埋葬されている「釜基地」、現存する唯一の長波電信施設で重要文化財指定の「針尾無線塔」、針尾生まれの幕末明治期の儒学者の屋敷「楠本端山旧宅」、引揚者が故郷に旅立った「南風崎駅」、うず潮と桜の名所「西海橋」、国内有数のリゾート施設「ハウステンボス」などがあります。

